

21 国 語 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** まで、10ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は50分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは**特別の指示**のあるもののほかは、各問の**ア・イ・ウ・エ**のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 山頂から朝日に輝く雲海を眺める。
- (2) 他校の生徒会役員を招いて懇談する。
- (3) 展覧会に出品した絵を先生に褒められる。
- (4) 氷上の華麗な舞いに、観客の拍手が起る。
- (5) 入学式を前に、新しい制服をハンガーに掛ける。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 親友と将来のユメを語り合う。
- (2) 高原の牧場で、新鮮なギョウニユウを飲む。
- (3) 幹線道路をチュウヤの別なく車が行き交う。
- (4) 長年の努力が、実験を成功へとミチビいた。
- (5) 発表の資料を作るために、図書館で文献をフクシヤする。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(* 印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

小学校五年生の島村千恵は、ふだん行き来なかった祖父のエンジ(圓治)の家で夏休みを過ごすうちに、自宅に帰りたなくなっていた。千恵の気持ちを察したエンジは、千恵が夏休みの間、少しでも長くとどまれるよう、その口実を作るために、道具箱を階段の上から投げ落として大きな音を立て、自分が階下に落ちて膝にけがをしたふりをしていた。

しばらくして、エンジは板塀を直した。あの道具箱から、ノコギリやらゲンノウやらを出し、木を切ったり、釘を打ったりした。あつという間に、ぼろぼろだった板塀は、立派になった。

「これでまあ、あと十年は平気だ。」

エンジは得意気に笑った。いつかエンジは言っていた。塀より自分の方が先にいってしまうから直さないのだと。なのに、どうして直す気になったんだろう。

やがて夏の終わりがやってきた。千恵が世田谷に帰る日だった。エンジの膝は治った——ということになっていた。電話してみたところ、美紀ちゃんは旅行に行っていて会えなかった。千恵は例の壁画のところに向かい、壁に描かれた切れ長の目の美紀ちゃんに言った。

「さよなら。」

またね、という言葉が足すかどうか迷ったけど口でできなかつた。なぜだろう。

「さて行くか。」

そう言ったエンジは、いつものダボシャツとステテコではなく、透かしの入った服と、濃紺のスポンをはいていた。エンジがそんな格好をしてる

のは初めて見た。千恵はびっくりした。

「え、なんで。」

千恵は尋ねたけど、見当違いの言葉が返ってきた。

いや、あるいははっちりだったのか。

「永代橋えいだいばしを渡りたいんだらう。」

「あ、うん。」

「一回くらい渡っておいても損はないな。ありや立派なもんだ。橋の向こうも、どうせ同じ地下鉄だし。」

⁽¹⁾「エンジも渡るの。」

「そうさな。」

エンジは、しばらくのあいだ、考える振りをした。

その気持ちは明らかなのだが。

「まあ渡ろうか。」

「向こう岸に行ったことあるの。」

「そりゃあるさ。」

ぐずぐずしている千恵を促したのは、エンジの方だった。

「忘れ物はないか。」

「うん。」

「じゃあ行こう。」

エンジはいつもの散歩道を通った。永代通りを真っ直ぐ歩いた方が早いのに、裏道を行き、倉庫の角を曲がった。自然と千恵の足取りは遅くなった。⁽²⁾少し歩くことに、エンジは待っていてくれた。

「いつでも来られる。」

エンジは言った。

「シゲが調べてくれたんだ。」

「え、なにを。」

「清澄きよずみ白河しらかわ駅なら一本だ。」

千恵の住む世田谷と、エンジの住む深川は、直通電車がある。地上線と地下鉄だけど、繋がっているのだ。

「そうだね。」

なぜ、そのとき、胸が痛くなったんだらうか。

「すぐだよね。」

やがて永代橋にたどり着いた。太陽はビルの向こうに沈んで、その輪郭だけが光っていた。

橋の手前で、エンジは立ち止まった。

⁽³⁾「行こうか。」

「うん。」

「渡るぞ。」

なかなか歩き出さない。しかし最初の一步が伸びると、あとはスムーズだった。いつしか、千恵はエンジと手を繋いでいた。エンジの手は大きくて、ごつごつしていた。硬かった。

「手、硬い。」

そう言うと、エンジは笑った。誇らしげだった。

「職人だからな。」

空いている右手で、千恵は永代橋の欄干に触ってみた。たくさんのでこぼこがあつて——リベットというのだとエンジが教えてくれた。——それ

に触れるたび、頭ではなく、手のひらが膨らみを記憶していった。この
感触は、ずっと残る。そう思った。頭で覚えたことは忘れてしまいかも
しれないけど、体で覚えたことは決して忘れないだろう。

「気が向いたら来い。」

「うん。」

「気が向かなかつたら来なくていい。」

「うん。」

(4) エンジは少し、躊躇^{ためら}った。言葉が残っているのがわかった。

迷った末、千恵は尋ねた。

「なに。」

エンジはしばらく答えず、ただ橋を渡った。永代橋はぐんと天に向かっ
て延びていた。とてもきれいだと思った。どこまでもどこまでも登ってい
けそうだ。向こう岸のビルは、ちらほらと光を灯^{とも}しはじめていた。まるで
キャンデルのようだった。これから、わたしはあそこに行くのだ。まるで

「俺^{おれ}はずっとここにいます。」

エンジは言った。

千恵は頷^{うな}いた。

「うん。」

どうしたって他の言葉は出てこなかった。エンジと手を繋いだまま、千
恵は永代橋を渡った。

ビルがぴかぴか光っていた。

風が吹いた。

海の匂^{にお}いがした。

(5) 千恵はエンジの手を、強く、強く、握りしめた。

(橋本紡「永代橋」による)

〔注〕 ゲンノウ——かなづち。

美紀^{みき}——千恵がエンジの住む深川で知り合った同じ年の女の子。

例の壁画——美紀が卒園記念に描いた自画像。

シゲ——美紀の祖父でエンジの古くからの友人。

〔問1〕⁽¹⁾「エンジも渡るの。」とあるが、このときの千恵の気持ちに最

も近いのは、次のうちではどれか。

ア 一人だけで大きな永代橋を渡ることを心細く思い、エンジに橋の向こ
うまで連れ添ってってくれるように頼もうと思っっている。

イ 家に帰る日になってようやく願いがかない、エンジが立派だと言う永
代橋を、一緒に渡れることを誇らしく思っっている。

ウ 永代橋を渡れることをうれしく思い、エンジも一緒に行ってくれるの
を分かりながらも、さらに確かめようと思っっている。

エ 深川を離れることを実感して寂しく思い、渡りたかった永代橋に、せ
めてエンジと一緒に行ってくれないかと思っっている。

〔問2〕⁽²⁾ 少し歩くごとに、エンジは待つていてくれた。とあるが、この表現から読み取れるエンジの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア その場を去りがたそうな千恵の気持ちを察し、名残を惜しませてやろうとさりげなく気遣っている様子。

イ 思い出深い町並を歩いているうちに、千恵が家に帰りたくなくなるのではないかと不安に思っている様子。

ウ ゆっくり歩きたがる千恵の気持ちを理解しながらも、早く家に帰るよう促そうかと迷っている様子。

エ 遠回りをしていつもの散歩道を歩くことで、少しでも長く千恵と一緒にいられることを喜んでいる様子。

〔問3〕⁽³⁾ 「行こうか。」 「うん。」 「渡るぞ。」 とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 力強く励ますエンジの様子と沈みがちな千恵の様子とを、二人の言葉を描き分けることによって対照的に表現している。

イ 迷いを振り切るように永代橋を渡ろうとしている二人の様子を、短い言葉を重ねることによって印象的に表現している。

ウ 永代橋を渡ることを決心するまでの二人の様子を、その場の会話を順序立てて描くことで説明的に表現している。

エ 渡りたかった永代橋を前にして勢い込んでいる二人の様子を、生き生きとした会話によって躍動的に表現している。

〔問4〕⁽⁴⁾ エンジは少し、躊躇^{ためら}った。とあるが、エンジが「少し、躊躇^{ためら}つた」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の本意ではないことを言ったにもかかわらず、千恵があつさり同意したのでその本心を問いただそうかと思つたから。

イ 千恵に言ってしまった言葉に付け足し、自分のところにいつでも来られるということを言おうかどうかと迷つたから。

ウ 千恵が意外な受け答えをしたので、自分の本当の気持ちがまつたく伝わっていないように感じて心外だつたから。

エ 帰つて行く千恵に自分の思いを伝えたが、続けて本心を言つても理解してもらえないかどうか不安に思つたから。

〔問5〕⁽⁵⁾ 千恵はエンジの手を、強く、強く、握りしめた。とあるが、あなたが千恵だとして、このときの気持ちをエンジに伝えるとしたら、どのように言うか。あなたの話す言葉を五十字以内で書け。
なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(・印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

餌を求めて一斉に巣から出発した働きバチは、蜜を見付けると、「8」の字を描くように旋回し続ける。すると付近を飛んでいた仲間のハチは、一斉に「8」の字のパターンを描いているハチのところへ集まってくる。この場合、「8」の字のパターンは、「餌がここにある。」ということの意味する記号の役割を果たしており、そのメッセージを解読した仲間は、いちはやく餌のあるところに集まることによつて、餌を探索する時間を大幅に短縮し、労働の効率をあげることになる。これは、動物の間での様々なコミュニケーションと、それに基づく目的的な協業のほんの一例にすぎない。⁽¹⁾その限りにおいて、記号を用いたコミュニケーションを通じて協業するということは、なにも人類の専売特許ではない。にもかかわらず、言語を用いた人間のコミュニケーションは、記号による動物のコミュニケーションにはない重要な特質がある。(第一段)

ミツバチは、蜜の存在に気付いたら、8の字の飛行を始めるほかはない。動物のコミュニケーションにあつては、ある対象(蜜)に接したことが原因となつて、その結果として必然的に、それを指示する記号の役割を果たす行動が生じる。そして、仲間のそうした行動に接したなら、そのことが原因となつて、それに反応する行動が生じる。ここには、飛んでいる虫が光源に向かって旋回しながら近付いていくのと同様の、因果関係(原因と結果のつながり)があるにすぎない。長い進化の過程で、彼らには、一定の対象を認知したら、ある定まった行動をするというプログラムがインストールされており、動物における記号的行動もまた、そうしたプログラム

に従つて、言わば自動的に生じる。蜜が存在しないのに8の字の飛行を始めたたりすることはない。つまり、動物は、うそがつけない。この点で動物は、人間とは根本的に異なっている。したがつてまた、動物の記号的なコミュニケーションにあつては、「相手の考え」、「相手の意図」という概念は登場しない。コミュニケーションが、記号の役割をになう行動と、それへの反応との間の因果関係によつて成り立っている限り、そこには、どのように体を動かした相手の思いや意図を推測する、というプロセスが介在する余地はない。⁽²⁾この点でもまた、動物のコミュニケーションは、人間のコミュニケーションとは根本的に異なっている。(第二段)

そもそも動物の記号は、語を組み合わせた文ではない。なるほど、「文」という概念を使つて説明するなら、ミツバチの8の字飛行という記号は、「蜜がここにある。」という文を省略した一語文であり、群れの端にいる個体が発する天敵の警戒記号は「敵が接近中だ。」という一語文とみなすこともできる。しかし、動物のコミュニケーションで用いられる記号は、パーツを組み合わせて作られた文ではないし、また記号をさらに組み合わせ、新たな記号列が作られることもない。(第三段)

ところが人間の言語は、そうではない。なるほど、「テキ」という語は、敵を指示しはする。しかし、単に「テキ」と呟いただけでは、いまだ確定した意味をもちえない。「いる／いない」、「来る／来ない」、「多い／少ない」という別の語(述語)と組み合わせられて文が形作られたとき、「テキ」という語は、初めて確定した意味をもつ。すなわち人間の言葉は、文というまとまりの中で、初めて確定的な意味をもつ。(第四段)

しかるに文というまとまりは、人間の言語においては、語を自由に組み合わせ、任意の文を作ることができる。その結果、実際には起きていな

いことを述べる文も、次々に作ることができる。いま一頭の小ぶりの天敵が近付いている、としよう。このとき、「テキ、いない。」「テキ、多い。」「テキ、大きい。」といった多くの文は、すべて偽となる。これらの文は、目下の状況では偽である。しかし、私たちは、これらの文の意味を理解できる。それはほかでもない、それらの文が真となるような状況を考えることができるからである。このように私たちは、語を自由に組み合わせ、任意の文を作りうるがゆえに、実際には起きていないことについて考えることもできる。いや、考えざるをえないのである。「果実」という語と「木に生る」という語を組み合わせ、「果実が木に生る」という文を作れば、これは、われわれの世界で真な文だが、「金」という語と組み合わせた「金が木に生る。」という文は偽である。しかし、「金が木に生る。」という文が意味をもつ限り、「金の生る木」という語も意味をもつ。(第五段)

このように、言語を用いた人間のコミュニケーションにあつては、言葉は、現にないものについてメッセージをつくるためにも用いられる。人間の言葉は、実際には存在しないものを、思考の対象として、言わば呼び出す、という意味で「非在の現前」である。人間の言語は、実際には存在しないものについての思考を可能にし、そうした思考の交換を可能にする。こうした言語によってコミュニケーションが進行することによって、人間の協業の仕方は、動物たちの協業とはまったく異なるあり方をしている。

(3) このことが、人間としての協業の根幹に、極めて固有の刻印を与えている。

(第六段)

今、目の前で実際には起きてはいないこと。そうしたものは、多種

多様である。しかし、まず第一に重要なのは、もはやないものごと、いまだないものごと、すなわち過去・未来のものごとである。動物は、その時点ごとに外界からの刺激に反応して生きていく。彼らは、常に現在を生きているにとどまる。もちろん動物でも過去の記憶は働いている。しかし動物は、「あのとき、こうだったのだ。」と回想したり、「あのとき、ああしていたら、こうはならなかっただろう。」と過去にはありえた可能性について考えることはない。(少なくとも、考えていると言えだけの証拠はない。)(第七段)

未来に関しても、同様である。動物も、未来を予知する働きをもっている。しかし、そうした予知は、ちょうど秋の深まりいく気配に接したら冬眠の準備行動が始まる、というように、自然の因果関係の一コマにすぎない。そうした動物たちにあつては、日照時間や気温などを通じて秋が深まる気配に接したら、特定の行動プログラムがオンになるのであつて、そこには選択の余地はない。ありうる未来・ありえない未来を想像し、そうした未来のどれかに焦点を合わせて計画を練る、というのは、極めて人間的な働きである。(第八段)

このように「非在の現前」としての言葉を操れることによって、私たちは人間は、過去・未来のものごとについて、共に考えることができる。これができるおかげで私たちは人間は、現在を、過去の選択の帰結としても捉えらるるとともに、そのように捉えた現在において、将来への影響を考えながら、ある選択肢を選びとる。すなわち人間は、動物のように単に現在を生きるのではなく、過去から未来への歴史を生きている。(第九段)

(大庭健「いま、働くということ」による)

〔注〕 インストール——組み込むこと。

〔問1〕⁽¹⁾ その限りにおいて、記号を用いたコミュニケーションを通じて協業するということは、なにも人類の専売特許ではない。と

あるが、ここでいう「記号を用いたコミュニケーションを通じて協業する」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 行動から読み取った仲間の考えや意図に基づき、それぞれがもつ固有の役割を果たしながら協力するということ。

イ 行動の模倣によって情報の意味を解読することを通して、仲間に合わせて同じように働き始めるということ。

ウ 仲間が示す様々な行動の意味を一つにまとめて解釈することを通して、共通の目的を理解できるようにするということ。

エ 特定の意味を示す行動によって伝えられる情報に基づき、同じ目的を達成するために仲間とともに働くということ。

〔問2〕⁽²⁾ この点でもまた、動物のコミュニケーションは、人間のコミュニケーションとは根本的に異なっている。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 動物は人間と異なり、刺激に対していつも一定の反応を示すことや因果関係に基づいて行動することができないと考えたから。

イ 動物はうそがつけられないため、かえって相手の思いや考えを推測して行動するようになるという点において人間と異なると考えたから。

ウ 動物は人間と異なり、事実にないことや相手の思いや意図に基づいてコミュニケーションを交わすことができないと考えたから。

エ 動物は組み込まれたプログラムに従って行動するため、思いやりに基づく行為も機械的になつてしまう点が人間と異なると考えたから。

〔問3〕 第四段と第五段との関係を説明したものとして最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 第四段で述べた内容を受けて、第五段ではその内容を発展させた具体例を挙げて説明を加え、論の展開を図っている。

イ 第四段で述べた内容について、第五段ではその根拠となる事例を付け加え、問題解決の手順を示している。

ウ 第四段で述べた内容に対して、第五段ではそれと反する見解を具体例とともに提示し、話題の転換を図っている。

エ 第四段で述べた内容に対して、第五段ではそれとは対照的な事例を列挙し、一つ一つ詳しく分析している。

〔問4〕⁽³⁾ このことが、人間としての協業の根幹に、極めて固有の刻印を与えている。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。

次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人間の思考は、過去や現在の状況に関係なく、常に未来のことのみを考える点に明確に特徴付けられると考えたから。

イ 人間の特質は、過去や未来などの実際に存在していないものについても言語によって思考し、伝達できる点にこそあると考えたから。

ウ 人間の想像は、言語の使用とは無関係に、広く過去から未来にまで及んでいる点が特に象徴的であると考えたから。

エ 人間の能力は、目の前で実際に起きていることや存在していることについて思考するときに、最も強く発揮されると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「言葉によるコミュニケーション」というテーマで各自が具体的な体験を示して意見を発表することとする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、あとの□の中のBは、本文中の□で囲んだAのもとになる漢文の書き下し文である。

(*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

孔子が呂梁川にある滝を見ていたときの話だ。

この滝というのは五〇メートルの高さから落ちてきて、すさまじい勢いで流れ下ってゆく――。

魚だつて、カワウソだつて、棲みつくどころか泳ぐこともできまい。

ところで、孔子が見ているとき、ひとりの男が水のなかに飛びこんだ。

孔子は、弟子たちを川岸に並ばせて、岸から男を引き揚げさせようとした。

ところが男は、一〇〇メートルか二〇〇メートル先のほうで、水面に

ひよいと出て、岸のほうへと抜き手を切つて泳いで来る。岸が上がつて、

髪は濡れたままで、のん気に歌を歌いながら歩いてゆく。

孔子はその姿に驚いて、追いついて、こう聞いた。

「まあ、君は人間わざじやないことをするね。いったいあの流れのなかで、どうやって浮いていられたのかね？ちよつと教えてくれないかね？」

「別に特別の方法なんてありませんや。」と、男は言う。

①「自分の持っているものだけで、十分なんですよ。」

自分に備わっている性質と体とを、自然の力に任せただけできあ。

自然はね、おれが渦巻の底まで行くと、次には浮き上がらせる力がある。

それに従つて動いていけばいいだけで、何か他に考えたりしないのさ。」

A 孔子が言った。

「いったい、自分に自然に備わったものというのは、何だね？どうも私にはよくわからないのだが、なぜ、自然のまままで十分だと言えるのかね？」

②「私はね、丘のある土地に生まれ育つたから、丘は安全だと思つている。

それに小さいときから水に慣れて育つたから、水を安全だと思つている。

これが私のなかに備わつた自然の性質ですよ。」

別に自分のしているのは学んだわけじやない――。

ただ、大きな力に任せて動いているだけさ。」

ここには老子は出てこないが、代わりに老子の思想を身をもって実践している男が登場し、彼の姿を通して老子思想が見事に語られている。

この話を読んで、私は自分が孔子サイドにいとます感じた。男のすることは無謀で危ないことだと思ふサイドであり、一般常識人の気持ちだ。

この男の行動に驚いた孔子は「いったいどうやって……。」と問う。

私たちも同じ質問をするだろう。

男の答え。——「自分に備わっている性質と体とを、自然の力に任せただけだ。」

孔子がなおも納得せずに「君に自然に備わったものとは？」と問うのに、男は言う。——「ただ、大きな力に任せて動いているだけさ。」

この言葉には、老子の「無為」のエッセンスがある。老子の説く、「無為」とは余計なことをするなということだ。それよりも自分に備わった「自然からのエナジー」に任せたい。困難や面倒ごとに直面したら、なおさらそうしたらいい、と言う。

このエピソードを話すと、私はかならずもう一つ、身近な実際にあつた例を思い出す。

私の住んでいる伊那谷には天竜川が流れている。ある年、カヌー競技の大会があつて、父親と息子が出場した。父親は私の知人で四十前後、息子は小学生だつた。コースの途中で難所があつて、父親はカヌーを操るテクニクをいろいろ使つたが、しまいに転覆した。息子はどうするかと見ていると、彼のカヌーは危なげもなく、すいっと難所を乗り切つてしまつた。父親が不思議に思つて尋ねると、息子は言った。——「恐かつたから、なんにもしないでいた。」

少年は恐いから水の自然力に任せ、滝の男は水の力と自分に備わる自然の性質を知つて水に任せた。ともに、自然の力に任せたのであり、その結果を見て、父親と孔子は驚いた。この驚きは二五〇〇年来、すこしも変わっていない。

(加島祥造「現代人の内なる老子と孔子」による)

〔注〕 エッセンス —— 本質。

エナジー —— エネルギー。

B 孔子曰く、「何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂ふ。」と。

曰く、「吾、陵に生まれて、陵に安んずるは故なり。水に長じて水に安んずるは性なり。吾の然る所以を知らずして然るは命なり。」と。

(遠藤哲夫「莊子」による)

〔注〕 何をか故に始まり、性に長じ、命に成ると謂ふ。

—— 生まれたままから始め、自分に備わった性質を伸ばし、天命に任せるところに完成するということかね。

陵 —— 丘。

所以 —— 理由。

〔問1〕 ① 自分の持つているものだけで、十分なんですよ。とあるが、「男」のこの発言の意図について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

A 直前の気のない返答に続き、自分の発言に対する理解は得られなくてもよいと相手を軽くあしらおうとしている。

I 直前の発言では相手の反応が得られないことを踏まえ、話題を転換することで関心を引こうとしている。

ウ 直前のぶしつけな返答に続き、相手の納得とは無関係に自分の主張を無理に押し通そうとしている。

エ 直前の発言が十分な返答ではないことを踏まえ、相手の理解を得るために補足して説明しようとしている。

〔問2〕⁽²⁾ それに小さいときから水に慣れて育ったから、水を安全だと思っている。これが私のなかに備わった自然の性質ですよ。とあるが、この部分に相当する一文を、**B**の書き下し文の中からそのまま抜き出して書け。

〔問3〕⁽³⁾ なおもとあるが、これと同じ意味・用法で「なおも」を用いて、二十五字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

〔問4〕⁽⁴⁾ 息子はどうするかと見ていると、彼のカメラは危なげもなく、すいっと難所を乗り切ってしまった。とあるが、ここでいう「危なげもなく」の意味に最も近いのは次のうちではどれか。

ア 不安を感じさせる様子もなく イ 何ら警戒するそぶりもなく
ウ 注意を促そうとする暇もなく エ 恐怖を表現する余裕もなく

〔問5〕⁽⁵⁾ この驚きは二五〇〇年来、すこしも変わっていない。とあるが、ここでいう「この驚き」について説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 安全な立場に身を置こうとしている人間が、人生の難局をしのぐには時に無謀で危険な行いも必要になるのだと知ったときの驚き。

イ 自分の能力に自信をもっている人間が、世の中には一見非力に見えても自分以上の能力をもつ者がいるのだと知ったときの驚き。

ウ 常識の枠で物事を考える人間が、人知を超えた自然の力に身をゆだねることで物事がかえってうまくいくのだと知ったときの驚き。

エ 小手先の技術を身に付けた人間が、地道な努力を重ねることこそあらゆる困難が乗り切れるのだと知ったときの驚き。